

ああ、相談業務

～ 翔子さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

15

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は前回同様、発達障害の子どもではあるが、とってもしアなケースについてお話ししようと思う。

家族

翔子さん（以下本児）は中学校1年生、父親は55歳、母親は53歳、兄弟は、兄がいたが死産している。父母ともに公務員である。

家は新興住宅街に建つ瀟洒な一軒家である。兄を亡くしたこともあって、本児が中学に上がるまでは、母親はずっと仕事をせずに、専業主婦で子育てに全力を注いできた。本児が中学に進学し、パートで働き始めた。

父親は仕事が忙しく、家にいる時間が短いこと

もあり、本児のことは母親任せで、ほとんど関りがなかった。

相談経過

スクールカウンセラーとして某中学校に行っていた時のこと。その中学校には月に2回行っていた。

新年度が始まって最初にお迎えテストと呼ばれるテストがある。本人の学力レベルをある程度確認するテストで、小学校の勉強内容である。そのテストが終わってしばらくしたころ、業務でその学校を訪れた。

1年1組の担任の先生から、ちょっとよくわからない子がいるので相談にのってほしいと言わ

れた。この先生は本校4年目で、ベテランの域に入る中年の男性の先生である。その先生が、「よくわからない」というのはいったいどういう状況なのかと、半分ワクワクしながら話を聞いた。

先生のお話は以下の通り。

本児は、ほとんど話さない、会話はほぼオウム返し、板書を写すことはできるし、字もきれいで、漢字もきちんと書くが、母親がいないとテストは何も書けないそうだ。何かが上手いかないと奇声をあげたり、物を投げたりする。小学校からの申し送りでは、本児は母親がいないと自分の力を発揮できないということで、主なテストの際には、母親が横に座ることも多かったという。現在までの小テストや単元テストでは、全く何も書けない。単に恥ずかしがりやだという話ではないのではと思う。理解力もないのではと思うので通常学級は難しいのではと思うのだが、本来の本児はどういう状態なのか、今までに経験がないタイプでまったくわからない。お迎えテストも母親が同席したいというので、別室で受けさせた。母親は特に何か話すこともなく、不正は感じられなかったが、テストはどの科目も80点以上とった。中間テストがもうじきあるが、保護者が定期テストにも同席したいという。こんなことも初めてで、校長と相談してお迎えテスト同様別室で受けさせてみることにし、スクールカウンセラーに状態を見てもらおうという話になったという。

そこでまずテスト前に本児の様子を確認したいからと一回面談を入れてもらった。

先生に案内されて入って来た本児に、「こんにちは」と言うと「こんにちは」と言った。「座ってください」と言うと「座ってください」という。先生が言っていた通りオーム返しである。理解できているとは思えなかった。もう一度「座って」と言って手で椅子の方に招くと、座った。その後も話してみるがすべてオーム返しで会話は成り立たない。視線も合わない。自閉症？そう思った。学校の相談室には心理検査具があるわけではないので、相談室にあったお手玉を持ってきて目の前に置き、「一個頂戴」と言って手を出したら筆

者の手に一個のお手玉を載せてくれた。そこで、「二個頂戴」と言ったら、全部載せてくれた。なるほど、数は一個しかわかっていないのか。では、色はどうか？今度はクレヨンを持ってきて、「赤はどれかな？」ときいて手をだすと、「赤」といいながら本児は赤いクレヨンを取ってくれた。「では青はどれかな？」と聞くと、「青、青」と言いながら、青いクレヨンを取ってくれた。二色はわかっているのか。「では緑はどれかな？」と言うと本児は茶色いクレヨンをくれた。「黄色はどれかな？」に対し黒いクレヨンをくれた。二色しかわからないということが分かった。手を出すことで何かを渡さなければならないということはわかるようだった。次に紙と鉛筆を用意し、「木を一本描いてくれるかな？」と伝えたが、理解が出来ない様子。「好きなものを描いて」といっても動かない。「なんでもいいよ」と言うが、描こうとはしなかった。指示が理解できないのだろうと思った。この年齢からすればあまりにも幼い。おそらく、3歳レベルには至っていないだろうと感じ、重度知的障害及び自閉症の可能性が高いと思われ、先生に状態を伝えた。この状態でテストに回答するという事は難しいと思われ、なぜ母親がいるとできるのか不思議に思えた。

そして、定期テストの日程に丁度業務が重なっているところで観察することにした。科目は家庭科で、理科室で行った。

母親は隣というより本児の左側やや斜め後ろに座った。距離は30cm位離れていただろう。ただし、母親が問題用紙を読める距離ではあった。不正がないようにということで、正面に先生が一人座って監督していた。

先生が試験用紙を配ると、早速鉛筆を持つ。名前を書くところまでは機械的にやっていた。問題を読んでいるという様子があまり感じられない中、答えを書いていく。ア～オの中から選ぶとか、選択問題が多い。中には線で結ぶものもあった。母親の様子をみていると、小刻みに体が揺れている。時々本児は母親の方をみるが、母親は首で「やりなさい」というように促すだけで、何も話さわ

けではなかった。

その様子を見ていて、何かおかしいと思った。もしかしたら、この母親は、声に出さないまでも何かのサインを送っているのではないだろうか？そんな思いが湧いてきた。本児の問題への反応は早く、サクサクと片付けていった。

そこで、テストが終わったところで、母子にそのまま理科室に残ってもらった。最後のテストだったので、それが可能だった。

机に理科室にあった文具をいくつか並べて、母親に本児に聞こえないように紙に『『のりをとって』と念じてください。』と書いて見せた。本児が紙を覗こうとしたので、それを制し、母親は言われたとおりに念じてくれた。本児には、ただ「とって」とだけ言った。すると「のり」をとったのである。なるほど、やはりそうか。今度は本児に紙と鉛筆を渡し、母親に「せ」と書いた紙（図1a）を見せて、これを念じて送らせた。その結果が図1bである。更に、筆者が紙に○と波（図2a）を描いて、それを母親に見せ、念じてもらった。そして、「描いて」と言うと、本児は図2bを描いた。この実験をしてもらい、母親もびっくりしていた。母親には、本児が母親のサインを何らかの形で受け取っているのではないかと思う。つまり、「試験も理解して答えているというよりは、母親がこの答えはイと思うと、それが伝わって本児がイを選ぶというかたちになっているのではないか」と伝えたのである。

図 1a

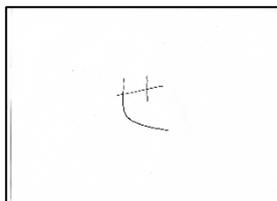


図 1b

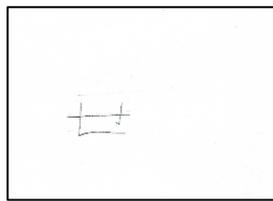


図 2a

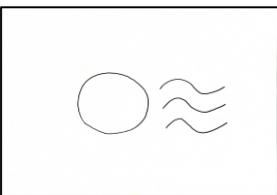
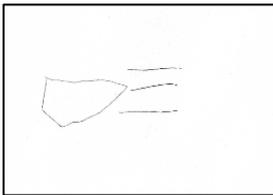


図 2b



母親は実際に見聞きして、納得したようで「そ

れでは何にもならないですよ」とつぶやくように言った。そこから母親との面談が始まった。

母親との面談の中で、本児の発達検査をきちんと受け、診断を受けるようにと児童精神科の受診を勧めた。本児の様子では、今までのテストも、母親の力でテストに答えることが出来ただけで、実力ではないこと、恐らく、知的にはかなり低く出るのではないかということも伝えた。母親はショックを受けていたが、児童精神科の受診を了解してくれた。

学校では普通学級で本児を見ていくのは大変だろうということで、幸いこの学校に併設していた通級学級の方で見ってもらうことにし、母親に了解をもらった。いずれ支援学級への変更を考えていた。

通級学級では、本児に対し、空いている先生などが対応し、一緒に遊んだり、体を動かしたり、日々の生活に必要な会話の練習などをしてくれた。職員室に入るときは「失礼します」、出る時は「失礼しました」とか、「鍵を貸してください」とか、学校で必要な言葉を覚えさせていた。

音楽の先生が、シューベルトの「魔王」を子どもたちに聞かせたときに、本児に対し「魔王だよ。魔王。魔王。」と何度も念じていたら、本児が「ま」と答えたと報告してくれたこともあった。本児には何かしら感じ取る鋭い力があるのだろう。

その後児童精神科で、重度自閉症の診断があり、知能検査では測定不能となった。母親は了解したが、父親は中々理解せず、母親が納得させるのに苦労していた。しかし最終的には父親も了解するところとなったが、支援学校への転学は希望しなかった。

母は本児を大学に連れていき、どう言う状況なのか、確認してもらった。大学では実験室で、母親と本児の間に遮蔽版を置いて確認したそうだ。その結果、遮蔽版があると何も伝わらないことが分かったと、後日母親から報告があった。何か波動のようなものが母親から本児に伝わっていたのだろうということであった。いわゆるエスパーではない。母親は、がっかりするところもあった

が、本児の能力で勉強が出来ていたのではないしエスパーでもないとわかったことでよかったとも言ってくれた。筆者は母親に対し、母親が、本児が生まれた時から、一所懸命に子育てをし、本児に母親の思いを伝えようとしてきたこと、そして本児も母親の思いを受け止めようとしてきたことが今回の結果に繋がっていると思う、母子の強い絆があってこそだと思うと伝えたところ、母親は涙していた。

本児はその後も3年卒業まで本校に在籍し、手厚い対応を受け、卒業後は高等支援学校に進学した。

まとめ

こんなケースに出会うことはまずないだろう。たまたま出会ったケースだが、母親の思いと言うのが如何に素晴らしい奇跡と呼ぶかという例ではないかと思う。将来何の役に立つのかと言われれば疑問である。ただ母子の絆の強さ、すごさに感動したケースである。母親に特別な何かがあったわけではないと思う。

文献を調べたところ、たまに、自閉症のお子さんに見られる特殊能力として、感じ取る力の強さから、まるでエスパーのような状態がみられることがあるとあった。ずっと昔に調べたので今検索しても出てこない。本児はまさにその状況であった。これはサヴァン症候群とは異なる。サヴァン症候群の特殊能力としては、音感、記憶力、芸術

的才能、計算力、共感覚（文字や言葉を色で感じたり、音を色で感じたり、情報が一般的な形で処理されることに加えて、一般的にはそれと無関係な種類の感覚や認知処理が引き起こされる認知特性）が突出していることである。もちろんそこまで突出していない、有能というレベルのサヴァン症候群も存在する。サヴァン症候群と思われる著名人は、山下清、野口英世、葛飾北斎、エジソン、アインシュタイン、ダ・ヴィンチ、キム・ピーク（レインマンのモデル）などが挙げられるだろう。

しかし、本児は決してサヴァンではない。母親がいないと何もできない、わからない、母親の力で操られている、操り人形のような状態である。母親なしでは何もできず、社会で生きていくことが難しくなる。母親はいつまでもそばにいるわけではない。それを思うと切ないが、本児が一人でも生きていけるようにするには、福祉制度にしっかり乗せて行くしかない。そのためにも高等支援学校に進めたことは一歩前進だと思っている。

母親の力と言うのは凄い。以前重症心身障がい者の方とのかかわりで、その人の母親は、今その人が怒っているか、機嫌が良いかなど、感情がわかると言っていた。筆者がいくら観察してもその違いがあまりわからなかったが、母親には瞬時にわかっていた。これも母子の長年の間に築かれた絆なのだろう。「一念岩をも通す」である。

本児が今どうしているのかはわからない。相変わらず時々奇声をあげているのかもしれない。それでも元気で過ごしていることを祈っている。